

## 2020年度 音展号

### 目次

#### 前書き

1. 桃太郎 by金平
2. マリージ事件 by秋のオレンジ
3. 波の下には byエディンバラ
4. 鏡 by浪人生
5. 猫のプロローグ byカイト
6. TRPGについて byTeruuuuuuuuu
7. 方舟 byMephistopheles

#### 後書き

## 前書き

この部誌を取っていただきありがとうございます。こちらは主に総勢7人の部員たちが  
べ切りと宿題に追われ書き上げた、汗と涙の結晶でございます。内容は勿論外見からして  
叡智の輝きがあふれ出し至高の玉水の泉からあふれ出す言葉の螺旋は見るもすさまじく  
完成されたものとなっています。是非とも家に一冊、ご家庭の食卓に添えるのに一冊、仕  
事場や通勤の電車の中で読むのに一冊、取引先との会談や久しぶりに会う級友たちとの同  
窓会へのおみやげとして六冊ぐらい持って行ってもいいでしょう。お風呂に入ってる時に  
読むのもいいですし、ジョギングの際に読むことで消費される体内脂肪の総量はなんと通  
常のジョギングの1.5倍にもなるそうです。（これはかの陸上部、部長が保証していま  
す。）

以上の点よりこの部誌を取った時点であなたの人生は荒れ狂い、凍えきった道ではなく  
赤い絨毯が敷かれ、完全整備かつ冷暖房の整った道が約束されているのです。

さあ今すぐ読み進めましょう！！あなたの道は今開かれるのです！

鬼と人との抗争が絶えない修羅の時代... 双方の血で赤く染まった川で拾われた桃は当時、鬼狩りとして名をはせていたある一人のおばあさんに拾われ「桃太郎」と名付けられました

「おい 桃太郎や、おなかがすいただろう。こっちへ来て食べなさい」  
おじいさんが声を掛けますが桃太郎はうんともすんとも言いません。  
だって桃ですから。  
「桃太郎やお前が着るにんじゅぎもん（産着）縫ってあげたよ」  
桃は服を着ません。  
だって桃ですから。

それから十数年がたちあれほど見栄え麗しかった桃も目をそむけたくなくなるくらいに腐って熟してまいりました。  
そのとき桃は何かを感じました。（誰かが俺を呼んでいる……？）  
それと同時に桃は自分の体が軽く浮き上がるを感じました。（どうなっているんだ……）

そしてなんやかんやあって桃が割れた並行世界（桃が呼ばれた世界）——そこでは鬼がはびこり、暇さえあれば人間を虐殺していました。

しかし人間側もあきらめてはいません。彼らは並行世界から呼ばれた桃太郎たちを筆頭にあたかもバリのカタコンベのように日本の首都、東京の下に地下王国を建国していました。

「しかしこれ以上どうするっていうんだよ。確保していた食料もだんだん底をついてきている……」

桃太郎・Lの意見はまるでその場にいたすべての桃太郎の意見を象徴しているかのようでした。ですがそんなことは言ってもらえません。彼らをここに集めたのはもともとこの世界にいた、言うなれば桃太郎・Aでした。彼は長期にわたる研究の結果、鬼はある一人の鬼、吾峠を倒したらいいということに気が付いたのです。しかし彼はまた絶望もしました。その鬼は自分の作り出した並行世界を移動して回っていたので正確な現在地がつかめなかったのです。そこで彼は最後の力を振り絞ってとうとう他の並行世界にいる桃太郎たちを呼び出すことに成功したのです。しかしそんな初代の思惑も知らない桃太郎たち……

「Let's all calm down! Should we just have one base for the next surprise attack? Because we are Momotaro!」

桃太郎・αの声にみんなの顔が期待で明るくなってきます。果たして次の戦いで桃太郎たちは勝てるのでしょうか……

#### 次回予告

やめて！ おじいさんの翼神竜の特殊能力で、ギルフォード・ザ・ライトニングを焼き払われたら、闇のゲームでモンスターと繋がってる桃太郎の精神まで燃え尽きちゃう！

お願い、死なないで城之内！

あんたが今ここで倒れたら、雉さんや猿さんとの約束はどうなっちゃうの？

ライフはまだ残ってる。ここを耐えれば、吾峠に勝てるんだから！

**次回「最大の敵は最愛のおじいさん！おじいさん死す！」ピーチスタンバイ！**

或るところに” グランド” という美術館がありました。その美術館の展示の目玉は” マリージ” でした。マリージは、ルビーとエメラルドが溶けて交ざった奇跡の宝石で、この秘宝を見るために毎日たくさんの人が押し寄せてきました。しかし、今話題のジャックと呼ばれる怪盗グループがそのマリージを狙うという予告状を美術館に送り付けました。しかも、1週間後の11月3日午後6時半に盗み出すという予告でした。そこで、美術館の館長は警察にすぐに連絡し、そして名は知っているが自称探偵の「とむ」を呼び出しました。「とむ」探偵（自称）はこれまでもジャックの盗みの事件に関わってきましたが、戦績は五分五分です。実は一般的な探偵協会にいる一般の探偵では、ジャックに出し抜かれてしまうので、この事実からすると「とむ」はすごいのですが、それ以外の事件については全く解決できません。「とむ」のすごさはジャック事件のときだけ発揮されます。すごさは、自分の犯した凡ミスが次々と功を奏し幸運にも盗みを起こすことができないというものでした。ということで、到底探偵だけで生活できないので、普段は古本屋の店主をしています。

そのために本業は探偵ではない＝自称なわけです。また、ジャックは3人グループで、慎重かつ大胆な犯行をします。今までいくつもの宝を盗んでいきました。

呼び出された「とむ」は今、応接室で探偵小説をよんでいます。そこへ館長がやってきました。

「急に呼んでしまいましたが悪かったですでしょうか。」

「別に良いのですよ。私の力が必要なのでしょうか？」

「はい。まあ早く本題に入りましょう。」

ここで館長は小声になり、応接室の中を見渡してからまた話し始めました。

「この宝石のマリージは知っているでしょう。なんとそれがジャックに狙われたのです。」

しかし私もそう簡単に盗ませる訳にはいけませんので、美術館の一番警備が厳重な所にマリージを隠しました。」

館長の言ったことをまとめると、まずその部屋の開けるのにカギがある入り口に警察を配置し、突破したとしても赤外線センサーがあり、マリージが入っている金庫の周りには落とし穴になっているのです。さらにその部屋には監視カメラがあり、天井は硬質ガラスになっているのでヘリを飛ばせば上からのぞけるということなのです。赤外線センサー、落とし穴、ドアのカギは館長が持っているとも言っていました。

「ほう、それは大したもの。」

「あと、2つほどマリージの偽物も用意しています。」

「では、こんなのはどうでしょうか。実は宝石は別の場所に隠していて、先ほど言って警備の厳重な部屋に偽物を置いておきましょう。」（小説に書いてあった方法です。）

「警備員も2人向かわせます。それと、偽物も「とむ」さんあなたに1つ渡しておきましょう。」

「あ。私はそろそろ帰ります。さようなら。」

「とむ」は格好をつけて帰ろうとしましたが応接室の入り口で絨毯につまずいてこけました。館長は本当に「とむ」探偵に任せていいのか不安になりました。

～一週間後～

「とむ」は館長と一緒に美術館の裏にある小さな小屋にやってきました。館長は金庫を置くために一旦「とむ」にマリージを渡しておきました。「とむ」はマリージをしまってから金庫を設置したあと「とむ」はマリージを出して、しまいました。金庫の暗証番号は館長が決めました。満足した2人が帰ろうとした時に、「とむ」が派手な音を立ててひっくり返りました。なぜマリージを隠している時にこれほどの音を立てられるのかと館長は疑問に思いました。…そして時間は過ぎて6時29分になりました。館長は数人の警察と美術館を巡回しています。「とむ」は裏の小屋で警備をしています。聞こえるのは大きなヘリのプロペラの音だけです。時間は減っていき6時29分になったその時、ドガアアアアア!!!バリリン!!という騒音が聞こえ、ズンと地面が揺れました。少し後に警察官のトランシーバーから、宝石が盗まれた!という声が聞こえてきました。館長が赤外線センサーと落とし穴の電源を切り、カギをもってあの部屋に駆け付けた時には、もう大勢の警察官が集まっていました。硬質ガラスが大きく割れ、ヘリがいなくなっていました。

「ヘリに乗っていたやつだ。そいつらが爆弾などでガラスを割ってロープなりなんなりを使ってマリージを盗んでいったんだ!」

そこで館長は少し得意になりながらも言いました。  
「ヘリの奴らが盗っていったものは偽物です。本物は裏の小屋にあるのです。」  
警察官たちは突然のことに驚き、困惑しています。  
「ついてきて下さい。」  
そして館長と警察官たち一行は小屋にやってきました。ドアを開けると小屋の中にあるはずの金庫がなくなり、床には「とむ」と2人の警備員が倒れていました。それも寝息を立てながら。  
「ど、どうしたんですか!」  
館長は言いました。が、しかし「とむ」の  
「あと…1時間だけ…ムニャ。」  
という間抜けな声を聞いた何人かの警察官が「とむ」達をたたき起こして言います。  
「何が起こったんだ!!」  
一番最初に起きた警備員がその時のことを思い出したようで、申し訳なさそうに言い始めました。  
「…あれは5時半を過ぎたぐらいのことでした。館長—今思うとあいつはジャックの一員です。そいつは差し入れだと称して、おそらく睡眠薬入りのおにぎりやお茶を渡してきたんです。『少し早いがどうでしょうか。』なんて言う具合にね。我々はまんまと騙されて全くそれらを疑うことなく食べてしまったというわけです。30分後ぐらいに眠くなってきて、10分もしたら寝てたのではないのでしょうか…。」  
最初は館長はどうしてこの小屋にマリージがあるのがジャックに分かったのか不思議でしたが昨日「とむ」が派手に転んだのを思い出し、納得しました。  
「ではマリージは……もう盗られてしまっ……。」  
あたりには沈鬱な雰囲気包まれました。  
「後に残ったのはこの偽物だけか。」  
そう言って「とむ」は服のポケットから取り出します。  
「そうですね、もういらないでしょう。捨ててしまっ……ん?ちょっとそれ、「とむ」さんみさしてくれませんか?」  
「?ああはい。いいですよ。」  
「……これは!マリージ!?」  
「そうでしょう、だからもう捨てて…え?今なんと?」  
警察官たちの間にざわめきが広がっていきます。  
「ですから、これは本物のマリージなのですよ!」  
警察官たちから歓声が巻き起こります。  
どうやら金庫を設置するときマリージが「とむ」の服の中で取り違われてしまったらしいのです。  
「……それも私の計画のうちなのです。ああ。もうこんな時間だ。」  
「あ、あのお礼は銀行に振り込んでおきます!」  
「ふっ、礼には及びませんよ。さようなら。」  
気取りながら帰ろうとした「とむ」は小屋の入り口に足を引っかけてずっこけました。最後まで格好がつかない人だと館長は思いました。

---

## 波の下には

エディンバラ

「波の下には 都がある」  
そうあの人は 言っていた  
冷たい海を 前にして  
ゆらりと浮かぶ 赤い旗

「波の下には 城がある」  
そうあのカメは 言っていた  
背中に乗って どんぶらこ  
帰ってくるのは 何年後  
「波の下での 幻に  
どうして人は 惹かれるの？」  
歌い終わった その娘は  
お母さんへと 問いました  
「見えない所は 綺麗だと  
人間は皆 思うのよ」  
優しく母は 言いました  
セイラー服を 捨てながら  
波の下には 何がある？

---

## 鏡

浪人生

秋も終わりが近づき、紅葉が散り始めている。寒い中洗面所でかじかんで汚れた手を洗っていると、目の前の鏡に違和感を感じた。鏡に映る背景はやけに暗く、後ろで団欒を満喫しているはずの家族の暖かさすら感じられない。真剣なまなざしでアニメを見る弟も、ビール片手に競馬の新聞を読み一喜一憂する父も、怒った時の父をなだめ生まれて間もない娘を抱きながら晩飯を作る母も無い。そこにあるのは冷たい機械とまだ温かみを残した家具だけだった。

空気清浄機がけたたましい音を鳴らす。この家を美しく造り直したいのか、警告の赤いランプが洗面所にいても分かるほどまぶしく、強く光っている。

キッチンの水道はポツポツとしたり落ち、冷たいシンクの底に落ちる。

父がよく聞いていた競馬のラジオでは、人気のない馬がごぼう抜きで一位をもぎとったらしい。父は負けて怒るだろう。今思うと父親はとてもひどい人だった。競馬が好きでいつも金を浪費していた。流行りのゲームも、散髪代も、受験の費用すら競馬に当てた。そのくせ家族には厳しく何かあるにつれ家族に、それも子供の中で唯一身体が成長しきっていた僕には一層強く当たった。

そのことを思い出し、なかなか取れない汚れに冷水にかじかんでく手があたたかみのない父と重なり虫唾が走る。

「おぎゃあ」

突然赤ん坊が泣き喚く。僕は焦りを隠せず寝かしつけようと振り向こうとすると鏡から手が伸び、僕の顔を鏡の方に向け直した。一体何が起きたというのか。確かに今僕は、何もないはずの鏡が起こした超常現象を目の当たりにしたのだ。思考が止まった僕に鏡は語りかけてきた。

「何を焦っているのだ少年よ。あの子は君の母親が毎日寝かしつけているではないか。そのうち泣き止むだろうさ。」

僕は恐怖と不信感に襲われた。コイツはどこまで知っているのだろうか。いつからここにいたのだろうか。鏡は答えた。

「すべてさ。」

私は包丁で鏡を突き刺した。割れた鏡には、ひびの入った僕の顔と、完全に冷たく、動きもしなくなった家のものだけだった。

僕は振り向かず玄関に行き、夜になり寒くなった外に厚いコートを着て走り去ることにした。

---

## 猫のプロローグ

カイト

「ではちょっとした事件のお話をします。この事件を解決出来れば採用します。ここでの解決は犯人の特定とトリックを

示すこととします。そうですね、制限時間は 15 分ということとしましょう。」どうして僕はこんな状態になってしまっているのだろう。

＊

僕の名前は、<sup>ねこ いし さとる</sup>猫 石 解。21 歳、現在無職。コンビニや居酒屋でアルバイトをしてみたこともあったが、どうも向いていないのか長続きしなかった。最近、自分に何が向いているのかを考えながら町をぶらつく生活を送っている。今住んでいる古いアパートもこのままだと来月分の家賃が払えない。

「そもそもあの人がいなくなればこんなことには…」そんなことを畳に寝転んでつぶやいた。今僕が大学に進学せずにこんなことをしているのかは 6 年前に僕の父親「<sup>ねこ いし さぐる</sup>猫 石 探」が失踪したのが原因だ。当時僕はまだ中学生で、それから母さんは昼も夜も働いて高校に通わせてくれた。僕はそんな母さんにこれ以上の負担をかけないために独り立ちすることを選んだのだ。とはいえ、無職では独り立ちとは言い難い。

さっきはあんなことをつぶやいたが僕は父さんのことを心から憎むことができない。そもそも僕は父さんのことが嫌いなわけではない。父さんがいなくなるまでは、ずっと一緒に遊んでいた。父さんは探偵でよく家を空けていたが、帰ってきたらまずは僕と遊んでくれるやさしい人だった。遊ぶといっても外で遊んだのは僕が小さい時だけで、僕がある程度物事に筋道を立てて考えることができるようになってからは、父さんはよく「謎」を出してくれた。「謎」は、初めは小学生でも解けるような簡単なものだったが、父さんがいなくなる直前にはとても難しくなっていて、一つ解くのに 1 か月かかったものもあった。僕が行き詰った時には、父さんは「探偵であれ」という言葉と共に一つだけヒントをくれた。一度、その言葉の意味を父さんに聞いたことがある。父さんにとって「探偵」はどんな小さな違和感も見落とさずだれよりも早く謎を解決する存在なのだという。僕はその話を聞いて僕にとっての「探偵」は父さんだと思った。だから僕は父さんの真似をすれば、どんな謎も解決できるような気がしていた。そんな父さんがいなくなって、大きな楽しみを失った僕は笑うことが減ったように思う。それも母さんが無理をする原因になってしまっていたのかもしれない。

ふと時計を見るともう深夜 2 時になろうとしていた。これ以上起きているのはさすがに明日に響く。瞼を閉じると思いのほか疲れていたのかすぐに眠りについた。

翌朝、目覚ましはいつも通り 6 時 30 分に鳴った。少し寝不足気味だが問題ないだろう。今日は昨晚見つけた張り紙に書いてあった場所に行ってみようと思っている。その張り紙には、場所と時給しか書いていなかったのも、何のアルバイトかわからなかったがとにかく時給がよかった。来月の家賃に加えて、母さんへの毎月の仕送りのこともある。

いきなりスーツを着ていくのはどうかと思ったので、私服で行くことにした。張り紙にあった場所はアパートから徒歩 5 分ほどの場所にあった。以外に家の近くにあったが今まで気が付かなかった。扉には「猫の探偵事務所」と書かれている。寄りにもよって探偵事務所である。さすがにやめておこうかとも思ったが、こんなことで母さんへの仕送りを止めたくない。自分の両頬を手でたたき気合を入れると、覚悟を決めてドアを開けた。

事務所の中は、手狭な応接スペースに置かれた簡素なスチールデスクと 2 人掛けのソファが二つ。少し進むと奥に書類のたくさん詰まったロッカーと、小さなキッチン、そして壁にかかっている大きな猫の絵が目にはいった。猫の絵はこの事務所の名前になんだものだろうか。応接用のソファではきれいな黒髪の女の人が本を読んでいた。彼女がこちらに気づいて声をかけてきた。

「いらっしゃいませ。私はこの事務所の所長の<sup>つき とも あかり</sup>月 共 明 です。仕事の依頼ですか？」

「いえ、バイト募集の張り紙を見たのですけど。」

「そうですか。では、こちらのソファにおかけください。」

彼女が立ち上がりソファに座るように促した。立ち上がった彼女の髪が肩の下あたりで揺れた。

「まず、お名前を教えてください。」

「はい。猫石解です。」

すると彼女は少し驚いた様子で言った。

「もしかして探さんの息子さんですか？」

突然父さんの名前が出てきた。これはどういうことだ？

「は、はい。そうですけど、父をご存じなんですか？」

少し困惑しながらこう言った。すると、彼女はどこか嬉しげにこう言った。

「探さんはこの事務所の先代所長です。」

とんでもない告白だった。でも、父さんならありえなくもないかなあ。そんなことを考えていると彼女は、今度は明らかに嬉し気にこう言った。

「早速ですが、ちょっとした事件のお話をします。この事件を解決出来れば採用とします。ここでいう解決は、犯人の特定とトリックを示すこと。そうですね、制限時間は15分というところでどうでしょう。」

話がすごい勢いで進んでいく。

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ。」

全然ついていけない。どうしてこんなことになっている？

「ではそうですね、あの事件にしましょう。」全然待つ気はなさそうだ。仕方ない。この試験を終わらせてからじゃないと無理そうだ。「この事件に名前を付けるなら『切り裂かれた死体』といったところですかね。まずはこの図をご覧ください。」

そう言って彼女は手近にあった紙に手早く何かを書き付けた。手際が良い。

「次に人物説明です。登場人物はABCDEの五人です。続いて事件の流れです。午前11時までは全員が廊下にいまして。12時30分A、Bが×印の場所でEの遺体を発見。」

「各々、その時間に何をしていましたか？」「鋭い質問ですね。流石、探さんの息子さんですね。」

11時、A、Bはキッチンに。Cは倉庫に。Dは居間に。各々北側のドアから直接移動。1時まではそこにいたらしいですよ。誰かが嘘をついているかもしれませんが。」

「Eはどこにいましたか？」

「Eは誰にも見られていません。ずっと廊下にいるということですね。続いて12時、A、Bは倉庫に。Cはキッチンに。各々南側のドアを使って移動。Dはずっと居間にいたそうです。そして12時30分、A、Bが廊下に移動して遺体を発見。以上です。さてここからが重要なのですが、遺体の状況です。遺体は体中が刃物で切り裂かれており、また首から上がありませんでした。頭部は西側の窓の下で発見されました。実はこの空間は5階で頭部は原型をとどめていませんでした。また死亡時刻は11時20分から11時50分の間です。では推理を始めてく…」

「ちょっと待ってください。各部屋にあるものを教えてください。」

「あつ、すみません忘れてました。」

忘れられていた。これでは解けるものも解けない。

「えっと、各部屋についてでしたよね。廊下は特に何もありません。次にキッチンです。ここには包丁やまな板などがあります。続きまして居間ですがテレビや机、ソファがあります。また、それらには動かした形跡がありません。最後に倉庫ですが、サッカーボール、ランタン、金槌、はしごなどがあります。いわゆる物置です。あ、ロープなんかもありましたね。刃物類は特にありませんでした。それと、全員外からこの空間に人を殺せそうなものは持ち込んでいません。あと、単独犯です。では今度こそ推理を始めてください。」

おいおい、この人いい忘れたことがかなり多かったぞ…。少し心配になって気になったことを聞いてみる。

「この事件A、Bだけふたりで行動しているのに何か意味があるんですか？」

「えっと、これは言っていないのかな？A、Bは私と探さんです。」

なんと。容疑者が半分になった。この人ほかにも忘れてそうだな。でも今はそんなことより解決しないと。犯人を突き止めるには死亡時刻の間にどうやって刃物を使ったのかを突き止めないと、探偵二人がキッチンにいる状態で。

「倉庫の道具を改造して刃物にすることは可能でしたか？」

「可能だったかもしれませんがこの事件でそんなことは行われなかったの考えなくてもよいです。」

ならどうやったんだろう？いや、ほかにも気になるころはある。どうして遺体の首は切り取られていたのだろうか？





## ゲームをはじめる前に

ゲームをはじめる前にGMは参加人数分のキャラシをコピーして、ルールブックを読み込み、みんなで遊ぶシナリオを作っておきましょう。シナリオとは大まかなストーリー構成のことです。ルールブックの後ろにシナリオが載っているのでそれを使うもよし、ネットに転がっているものを拾ってくるのもよし、自分の世界観で楽しみたいから自分で作るのもよし、あなたの好きなようにしてください。

## ゲームの進め方

- ①まずみんなで集まって、騒げる場所に集まりましょう（誰かの家とかマクドに）。
- ②TRPGについて少し説明しましょう。集まっている人たちが詳しい人たち、一度やったことがある人たちならば省略して良いです。
- ③キャラシに書き込めるだけ書き込みましょう。基本はサイコロを振って決めますので、そこまで苦勞することはないと思います。
- ④後はGMの用意したシナリオ通りに進めましょう。詳しいことはルールブックを読んでください。

## あとがき

正直これ以上書くことがないです。実際にやってみるにが一番なので…ここでどんだけ説明してもやって見ないと、この楽しみは分からないので。YouTubeやニコニコ動画にリプレイが流れているので見てみてください。TRPGは極めて自由度の高いゲームなので、大袈裟にいうとルールブック一冊で一生楽しく遊べます。全力でお勧めするのでぜひやってみてください!!

『僕たち〈インフィニット・デンドログラム〉は君たちを歓迎する』

---

方舟

Mephistopheles

幼い頃に僕は聖書の絵本を貰った。ハードカバーで開くと軋むその本は、取り出しやすいよう本棚の縁に寄り掛かるようにして置いていた。僕はその頃は、聖書といっても変わった話が沢山載っている絵本としか感じなかったけれど、童話に無い気風を纏っていて他の絵本とは別格の扱いをしていたように思う。物語の内容に即した見開きの挿絵は時代を感じさせるくすんだ色の水彩画で、物語の内容に即すよう神の成された奇跡が描かれていたが、どれもが人々に恵みをもたらすというわけではなかった。ジグuratの麓で混乱する人々、溺れるエジプト人、火の雨と塩の柱…それらは幼い僕の目に焼き付いた。

確かに彼らは神を軽んじた。しかし、その頃の僕にはそう割り切ることが出来なかった。僕はその頃、幼く、未熟で、物事をよく理解していなかったが、同じ人間として今直ぐに本の中の彼らに手を差し伸べたいと思った。

その中には「ノア方舟」も含まれていた。挿絵には、水を吸って暗い色を呈した窓一つない方舟の方へ、一縷の望みをかけて、迫る水を避けるように日干し煉瓦の家の屋根に身を寄せる人々が何かを掴み取ろうと手を伸ばす…そのような

風景が描かれていた。その人々の幽愁に染まった暗い色の水が、今にも漏れ出てくるようで、怖かったのを思い出す。そう、今では笑い飛ばせるような空想も全て、あの頃は現実だったのだ。

「ノアはどうして溺れ行く人々を助けなかったのだろうか？ いくら神様がそのように言ったとしても、僕だったら直ぐにでも手を差し伸べるのに…」

神への信心の方が人の命より重く見られることがその頃は信じる事が出来なかった。いつだったのだろう、この本が棚から消えていたのは。この多くのことを教えてくれた絵本は今では読もうとしても、それは出来ない。

~~~~~

現代

「ここに入って何日経ったのだろうか？」

「分かるわけがないだろう。別に知らなくても困ることは無い。」

「今は昼なのだろうか、それとも夜なのだろうか？」

「どうだってよいだろう。眠たければ眠ればよい。」

こうしたやり取りをずっと頭の中でしていた。無論、一人で。

一人でいることがこれ程身に応えるとは知らなかった。孤独で頭がおかしくなることは知っていたけれど、たった数日でこんな状態になるなんて…いや、本当に数日か？ もう何年もここに閉じ込められているような気がする。周囲のコンクリートから伝わる無機質な冷たさは体を徐々に侵食し、ぼんやりとした不安を僕に与えている。天井に備え付けられた電灯は不規則に点滅を繰り返し、影の存在を強調していた。

不意に地震のような重厚な響きが体を小刻みに揺らし、壁が軋む。不吉なはずのその地響き今では僕には希望の印へと変貌していた。…また一つ数が減った。その自分でもよく分からない達成感に突き動かされて床に転がっていたチョークで壁に少し歪んだ線を引く。真っ白なチョークが磨り減り、碎片が壁を伝って落ちる。

ただ信じ続けるしか手立ては無かった。

~~~~~

紀元前2500年前

方舟の中への積み込みを終えて、ノアは今一度巨費を投じて作ったこの巨大な船を見上げた。船底には船が倒れないよう今は木の枠組みが敷かれているが、船の威厳は変わらない。

その巨体は太陽の煌めきを受けて優美に輝いていた。

私の一族は、バビロニアに住む人々とは起源が異なるらしく、私の一族以外皆あの聖塔に居る神を信じているらしい。何度かバビロニアに住む知人にあの神のすばらしさを説かれたことがあったが、全く理解できなく、ただ相槌を打っただけだった。どうしてあんな神が偉大だといえるのだろうか？ 神が人間を超越しているのならば、あのような人間の作った建物に神が宿るわけがない。私は人付き合いのため表面上は聖塔に居る神を信じているが、出来るのであれば皆の前で公然と聖塔の神が誤っていて私の神こそ正しいことを知らしめたかった。

これは私の神と聖塔の神との戦いだ。勝ち負けは単純明快で、私の神の仰せられた通り、大洪水が起きれば私の神が正しく、そうでなければ聖塔の神が正しい。つまり神から天啓として大洪水が起きることを知らされ、作ったこの方舟その物が、あの誤った神を打ち砕く武器となるのだ。

ノアはもう一度方舟を眺めた。その燦然とした姿は自分の神が正しいと物語っているように思えた。

ただ息子達の方はそうではなかった。父が自分達に残されるはずの財産の大半をあの木造の巨大な船に使い込んでしまったからだ。息子達はなにも神の声など聴いておらず、自分達の神が正しいかどうかなんてどうでも良いと思っていた。父がある日いきなり天啓を受けたなどと言いだして独断で無駄に大きい船を作ったことによって、友人には笑われたり、道行く人々には後ろ指を指されたり、家を建てる費用が、父がナツメヤシを買い占めたことによって上がったなどと非難されたりするのだ。息子達は、もし大洪水が起こらなければ、父を狂人として追い出してやろうとさえ思っていた。

そのような思いをそれぞれ抱えながらノアの一族は方舟に乗り込んだ。

コンクリートのかべに埋め込まれたガイガーカウンターは依然として振り切っていて、針が目盛りのない所を指したまま微動だにしない。故障しているのではないかななども考えたが、確かめる術はない。ただただ信じるしかないのだ。

その横には既にただの黒い鏡と化したテレビがあった。以前は点き、自国に向けて核ミサイルが仮想敵国から発射されたことにより、このコンクリートの箱への避難指示が出され、這う這うの体で地下室へ駆け込んだあと、このテレビで震える体を必死に押さえ、事の成り行きを固唾をのんで見守ったのだった。この国の自慢であった、自称97%命中する迎撃ミサイルは、全くもって役に立たず、ミサイルは自国の上空で分散し、僕の町を含むいたるところに着弾した。その直後、テレビが点かなくなった。

今でも着弾が続いているということは、自国も反撃をしたのだろうか？地表はどのようにになっているのだろうか？このコンクリートの箱からではすべてが憶測になる。上部のハッチを見つめる…いっそのことを開けてしまおうかなぜならこの箱から外は全てが真実なのだから…などという馬鹿らしいがどこか惹かれてしまう考えが頭を過った。地下室へ逃げ込んで、これを何もかも終わるまで開けないと心に決め固く締めたハンドル…ちょうど二本の棒を交差させたような形のもの…は今では十字架にしか見えなかった。

急ぎで作ったため、武骨さが否めないこの方舟は、いくつもの部屋で仕切られ、バビロニアにある全ての物が詰め込まれたが、まだ部屋に空きはあった。

約束の刻限が来て、ノアは甲板へ続く戸を固く締め、船の中核に繋がる階段を降りて行った。遂に私の神が正しいのかどうか分かる時が来たのだと、ノアは重い足取りで廊下をわたり、息子達の居る部屋を訪れた。息子たちは低い声で何やら話していたが、父が来たと知るとぴたりと止めた。息子達はそれぞれ既に婚姻していて、傍には妻が控えていたが誰もが落ち着かない様子であった。

「私たちには神がついている。必ずや洪水は来よう。」

ノアは鼓舞するように言った。その声が引き金になったように、船底から砂の流れる音がした。洪水である。

ノアの信じた神は正しかったのだ。

## バビロン、方舟の外

雪解けによって増水したティグリス、ユーフラテス川の流水は堤防を越え街にながれこんだ。砂漠が水を吸い込み、黒く染まる。

混乱した人々は聖塔に集まり、神に助けを乞うた。腰下まで達した水は人々の不安を煽った。彼らの神は何も施そうはしなかった。そこには神への信仰をとるか、自らの命をとるかの葛藤があった。というのも、聖塔は神の宿る建物であるため、誰もその階段を登ってはならなかったのだ。しかし助かるためにはその階段を登るしかない。聖塔はかの有名なエジプトのピラミッドより高かったのである。

水は胸まで達し、また一人、また一人波に吞まれ消えていく。そのカウントダウンを破った者がいた。一人の男である。その男は、信仰を捨て階段を震える足で登り、水が滴った。その行動が人々の密かに持っていた疑心を煽った。

「どうして私たちの神は、私たちを救ってくれないのか。私たちの信仰した神は誤っていたのか。」

と誰かが叫んだ。それを受け、ついに人々は決心した。私たちを救ってくれない神は信じるに値しない、早く聖塔を登るのだ、と。

人々は、一斉に聖塔を登り始めた。しかし、人々は知らなかった。聖塔の表面は彩色焼き煉瓦が使われているが、芯には、水に弱い日干し煉瓦が使われていることを。水を吸収した煉瓦は、泥に還元し、そこに大勢の人が乗った事により、付加が掛かった。そうして聖塔は瓦解した。大勢の掟を破った者と共に。全ては水に飲み込まれた。

波が船底を打つ音の狭間から人々の絶叫が聞こえる。ノアはただ呆然とした。その魂の叫びが彼を責めるように船内に反響する。ノアは一人考えていた。私の神は私たち人間を神の姿を模して創られ、また神の持つ能力、「知恵」を与えた。

また、私の神が洪水を起こした理由は、バビロニアの人々が誤った神を信じ、数々の悪行を行ったからだとは私は聞いた。しかし、なぜ知恵の持たない動物は悪行をしないのに、知恵を持つ人間は悪行を起こしてしまうのだろうか？それは、知恵が原因なのではないのか？知恵がその原因なのであれば、神も同じく悪行を行ってしまうのか？なぜバビロニアの人々は他の神を信じるようになったのか？それは、私の信じる神が知恵によって信じるに値しない者であったため、新たな仮想の神を創り出さなければならなかったのではないかと。

絶叫はもう既に聞こえなくなっていた。

~~~~~

ガイガーカウンターは依然として動かない。僕は箱から出るか否か決めかねていた。確かに振動は暫くの間無い。僕は埋め込みの観音開きの戸を開いた。そこには鉛板の入った防護服が収納されている。この防護服によって体が放射線にさらされることを防ぐのだ。本当はガイガーカウンターが今のこの値を指している時は使うことができない。僕は箱の外がどのようなになっているのか知りたかった。このまま一人箱の中に閉じこもって不確かかもしれない装置の針が外に出ることのできる値を指すまで永遠に睨めっこしたくはないし、そのようにすれば本当に狂ってしまうと自身でも薄々分かっていて。けれども、その決断によって今までずっと待っていたことの意義が無くなるのは避けたい。このような自分の状況を自分の外の視点から見つめたとき、僕は一つあるかなり有名な数学者が言っていたことを思い出した。その内容は以下のようなものである。

その数学者は、人々の前でこのように言ったそうだ。「神を一つ信じるならばキリスト教が最も良い」と。人々は数を扱う数学者がこのように言うのを不思議に思っ理由を尋ねると、その数学者が言うには、「キリスト教の教義には、『キリスト教を信じなければ最後の審判の時に地獄に落とされる』というものがある。しかし他の宗教では、その宗教を信じていなければ世界の終末時に救われないというものはいくらも無い。これから考えると、もしキリスト教の神が実際は誤っていて、他の宗教の神が本物であったならば、キリスト教を信じる人は、笑いものになるだけで終末時にはかなりの確率で救ってもらえるだろう。だが、もしキリスト教の神が正しいのであったならば、キリスト教を信じる者のみ救われ、あとはすべて地獄行きだ。ゆえ、キリスト教の神を信じたほうが他の宗教の神を信じるよりもほんの少しだけだろうが、地獄に行かなくて済む確率が高いからだ。」ということだという。僕の状況をこれに当てはめると、「もしこのガイガーカウンターが正しい値を示しているとすると、外に出ることは命に係わり、もしかしたら狂人になる前にガイガーカウンターが安全な値を示すかもしれない。しかし、ガイガーカウンターが故障しているのならば、僕は外が安全なものも知らないまま、箱に閉じ込められた狂人という檻の中の動物よりもたちの悪いものに成り下がってしまう。」というものになる。この場合、狂人になる方が命に係わることをするよりも自分の中では避けるべきものだったので、あくまで確率であるが、外に出る方が自分にとって得である。この久しぶりに行った論理的思考に背中を押され、僕は外に出ることにした。

~~~~~

ノアはその時、神の声を聞いた。

「ノアよ、お前は私を疑うのか。私は信心深いお前を助けてやり、其のうえ望み通りバビロンの人々に自らの神が間違っていたことを気付かせ、あの聖塔も彼らの手によって壊させた。このようなことをさせておいて今頃裏切るなどもつてのほか。どうだ、そうではないのか？」

ノアは一言静かに答えた。

「お前は神の器ではない。」

この一言は神の逆鱗に触れ、即座にノアをこの世から消してしまった。しかし、ノアも馬鹿ではなかった。彼は息子たちが自分の信じた神を信じていないことを知っていたのだ。ノアを消した時点で、神の言葉を聞けるその神を信仰する者は一人もいなくなったのだ。神はこのことに気付いたが、時既に遅し。神の存在意義は無くなり、神も同じく消えた。そう、神は死んだのだ。

~~~~~

僕はハッチの十字を握って力一杯左方向に回した。長い間使っていなかった筋肉が、軋む。それでも怯まず回し、遂に箱の呪縛を解いた。二重の二つ目のハッチを開けると空が見えた。赤い……それだけが僕の印象だった。僕のいた箱の上には元々自分の家があったが、それは、家が風に靡いたような恰好で止まっており、鉄骨と少しのコンクリートが一種の「作

品」を作っていた。あたりは一面平らで時々その「作品」が見えた。

殆ど全て気化したのか…僕は心の中でその空気を肺一杯に吸い込んだ。

[t h e e n d]

※この短編では、半減期を考えていないなどかなりたくさんおかしい点があります。文中のジググラトと聖塔は道義です。また一部某偉人の言葉を使用していますがその意義については、とくに深い意味はなく、ただ単にその人が個人的に好きであったため使ってみました。

---

## あとがき

17499文字 この数はこのあとがきを含めた総字数です。こんなにページ数が多いのは結構学報部としては久しぶりなんですけどその分読み応えのあるものとなってます。それにしても今思い出すとかなり危うい中よく完成することができたなと思います。学報というからにはワードを使うので必然的にある程度のタイピング能力を必要とされるんですがブラインドタッチはともかく両手で打つことすらできない人しかいないし、誰かに張り合おうとして六千文字を目指す人などがいて協調性というものが無いんですよね。そういった点で今は達成感しかありません。

ちなみに僕は最近 SANGARIA さんの果汁と果肉たっぷりのミカンジュースにはまっています。こんな場所に書くなと思う人がいそうですがこれが本当にやばいぐらいおいしくてこうグイッと飲んだ瞬間にのどのほうにミカンの果肉一粒一粒が流れ込んできて口腔内にミカンの甘酸っぱさと柑橘系の匂いがあふれるんです。しかもかなりのボリュームと美味しさでお値段なんと税込み138円！やばくないですか？

あともう一つあるんですが同会社さんのイチゴミルク🍓ものすごくおいしいんでぜひ機会があったら飲んでみてください。

最後になりましたがこの度はこの部誌を読んでくださりありがとうございました。



【2020年度音楽と展覧の会にて】